

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 清水 康宏

本論文は、作曲家ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770-1827) 晩年の作品《ミサ・ソレムニス》(1823年完成)の受容史を、1850年代から70年代の音楽批評の言説分析を通して検討することで、19世紀後半のドイツ語圏、とりわけカトリック文化圏における宗教と芸術の関係を明らかにするものである。自身カトリック信徒であったベートーヴェンがカトリック教会のために作曲したものの、実際に典礼に用いるには様々な点で不都合な、このミサ曲は、教会音楽の歴史における「問題作」であり、その歴史的な位置付けや影響関係についても、十分には明らかにされていない。そうした問題意識のもと、本論文は、受容の過程を丁寧に辿り直すことで、この作品が、教会音楽やキリスト教神学をめぐる同時代的動向に、さらにはキリスト教を包摂しつつ相対化するものとして登場した「宗教」という一般概念の形成に深く関与していたことを明らかにした。

本論文は二部、七章で構成されている。第一部(第一章から第三章)では四人のプロテスタントの論者による《ミサ・ソレムニス》評が、第二部(第四章から第七章)では四人のカトリックの論者によるそれが扱われる。とくに後者は、ほとんどの先行研究が見落としてきたものであり、本論文の大きな達成もそこにある。

この作品のなかに「神的なもの」と「人間的なもの」の「和解」を見出し、芸術と宗教が一体になった「未来」を構想したブレンデル、声楽と器楽が一体になった総合芸術としてこの作品を捉えたヴァーグナー(第一章)、《第九交響曲》へと至る「言葉と音の弁証法的展開」における「否定態」という、懐疑的評価をこの作品に与えたマルクス(第二章)、そして、本来「フモリスト」を目指していながら、「超越」を志向したことにより「民衆」の世界から乖離してしまった作曲家の困難と挫折をこの作品から読み取ったノール(第三章)。これら四人のプロテスタントの論者は、このミサ曲を「教会音楽」ではなく「芸術音楽」として理解し、自律的芸術として「現世的」(ヴェーバー)救済機能をもつか否かという観点からそれを評価したのだ、と本論文は主張する。

他方、カトリックの論者はどうだったのか。ベートーヴェンの器楽がもたらす感情はカトリックの教義と矛盾しないと考え、新時代のカトリシズムを体現する「教会音楽」としてこの作品を評価したラウレンツィン(第四章)、独自の「弁証学」に依拠し、伝統と現代性を合致させる「真の教会様式」としてこの作品を位置付けたアンブローズ(第五章)、教会音楽家・司祭の立場から「教会音楽」と「宗教音楽」の間に独自の線引きを行い、ベートーヴェンを含む、ウィーン古典派の三巨匠のミサ曲を「宗教音楽」として評価したシュタイン(第六章)、さらに、この作品の「非教会的」要素を認めつつも、それは、教会音楽が表現すべきカトリック(普遍)のあり方を示す「未来のミサ曲」であると考えたヴィット(第七章)。これらの言説の吟味から本論が導く洞察は、「進歩的プロテスタント」対「後進的カトリック」という、世俗化論における従来の支配的言説に再考を迫る。音楽史の範囲をこえた本論文の学術的達成が、ここにある。

審査委員会では、キリスト教史全体にとっての本テーマの意義など、いくつか今後の課題が確認されたが、それらはどれも本論文の価値を損ねるものではない。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものであると判断する。